

センター つづくん

No.121



子どもの風景 第19回

最後の行事「6年生を送る会」(2月27日)

山口 涼

今日は、最後の行事「6年生を送る会」でした。入場の際はすぐきんちゅうしていて、どきどきしていたけれど、みんな笑ってくれていたから、きんちようがなくなりました。

2・3年生の発表は、鬼の役の子がかわいかったです。

「6年生が卒業すると、さみしいなあ。大丈夫かなあ。」

のセリフの後に、はやと君が、

「でも、山ちゃんももう1年いたって言ってたから大丈夫だね！」

と言って、(ぼくが言ったことをしっかり聞いているんだなあ)って思っ
て安心しました。マイムマイムも、全校のみんなで楽しくおどってよかつた
です。1年生の発表は、みんなしつかりした声で話していたし、「ありがと
うの花」に書かれてあったことを読んですごうれしかったです。あと、歌
も大きい声ですごくかわいかったです。4・5年生の発表はクイズで、(どん
なクイズなのかなあ)とわくわくしながら楽しみました。「みんなでゲーム
は、みんなだ」「だるまさんが転んだ」をしました。すごく楽しかったです。
ぼくたち6年生は、学習発表会でおどった「グリーングリーングラス」を全
校のみんなといっしょにもう一度おどりたいとお願いました。(みんな覚
えているかなあ)と心配していましたが、みんなダンスを覚えてくれていた
のでよかったです。

ぼくたちが退場するときのアーチでは、(みんなたくさん笑って見送って
くれて、よかったなあ)と思いました。

目次	2025年12月
子どもの風景(第19回)	1
特集 明日も笑顔で行きたくなる学校 明日も笑顔で行きたくなる教室	
群読、オペレッタの実践を通して	佐々木大介 2
「バタフライエフェクト」を希望に	高橋 研一 4
お互いの「笑顔で」を耕せる	小野寺浩之 8
人・学級・学年・学校に	千坂 朋広 11
教育時評 学習指導要領次期改訂の構想と問題点	
	本田 伊克 14
サークル訪問③ 白石サークル「しゃべり場」 サークルは一番の学びの場!	渡邊 浩一 16
授業への招待⑪ 算数 「小数の倍」と「割合」における2量の操作	林 和人 19
子どもと学校 学級担任を離れて気付いたこと	高橋 桂吾 20
おすすめ映画	阿部菜知子 22
読書のすすめ(第22回)	矢部智江子 22
相談センター報告(第41回)	内記 英明 23
ひと言	渡辺 孝之 24
子どもの風景 作品について	佐藤 秀寿 24
センターの動き・編集後記	24

明日も笑顔で行きたくなる学校①

明日も笑顔で行きたくなる教室

佐々木 大介

「はい、はい！」

いつもは黙って手を挙げている子どもたちが、声を出さずだけでなく腰を半分浮かせている。誰かが立ち上がって黒板の前に出ようとすると、負けじと席を離れてやってくる。

漢字の「小さい」を3つ書き、どこが間違えているかを探す授業の時だ。

「1画目のはねているところが、向きが逆になっている。」

「2画目は、はらいなのに、はねているからだめです。」

明らかに漢字の間違いを指摘できるので、自信をもって答えている。あまり手を挙げない子もみんなの勢いにのせられて「ちがーう！ そこ！」と声を出している。

もう間違いは出尽くしているのに目を皿のようにして探す子どもたちは真剣だ。

しまいには、正しく書いたつもりの文字に対しても、

「これは、はらう角度がちよっと違っている。」

「そうそうちよっと横向きになっっている。」

そう言われると、手本と同じように書かなければみんな納得しない。何度も書き直すが、何度書いても、

「先生、ちよっとちがう！」

とだめだしされてしまう。でも、それが子どもたちにとっての楽しい時間になっている。

「おじいさんは、大根のたねをまきました。」

「ダウト！」

「大根じゃないよ。かぶだよ。」

「犬は、さるをよんできました。」

「ダウト！」

「犬がよんできたのは、ねこです。」

集中力がなくなってきたときにダウト読みをすると、子どもたちは息を吹き返し、教科書をじっと見つめ教師の読みに耳を傾けるようになる。それどころか、物語にない動物を登場させると、うれしくて仕方がないようだ。教室中が笑いに巻き込まれる。

「またやってほしい。」

と休み時間になってからおとなしい子が話しかけてくる。ああ、この子は音読ダウトを楽しみにしているのだなあとと思うと、その子のためにもまたやってあげたいと思う。

1年生にとって小学校は、保育所や幼稚園と異なり、大人数の教室で決められた時間割通りに進むので、じっと座って1日を過ごすことはとてもつかれる。みんながみんな新しく学習することに目を輝かせ、張り切って取り組む子ばかりではない。ノートに書くことや声に出して音読することに抵抗を感じている子もいる。そんな子どもたちが授業の中でリラクセスし、笑顔を見せる時間を大切にしたいいつも考えている。

2学期になり、算数では「くりあがりのたしざん」の授業が始まった。



「先生、また水の実験したい！」

水の実験とは、1学期末の「かさ」の授業のことだ。

異なるペットボトルの水をコップ何杯分になるかを調べてみたり、どちらのボトルが多いのかを比べるために水の入れ替えをしたりした。あちらこちらで、

「こっちは4杯とちよびつとでこっちは4杯と半分だから、こっちの方が勝ってる！」

「うちのは両方ともほぼ3杯だったから、同じ量だ。」

「こぼしちゃったあ。先生どうしよう？」

「どうきんでふけば大丈夫です。どんどん続けてください。」

だんだんやり方がわかってくるので手際よくなってくる子もいるのだが、水遊びに転じてくる子もいる。

「おしっこだあ！」

と言いながら自分のまわりの床に水を撒き散らしている。

あまりにも楽しそうにしているのでそのまま見守る。しかし、すべて転ぶ子が出てくるほど教室は水浸しに。拭いても、拭いてもこぼした水はなくなるらない。

「先生、大掃除になるね。」

「こっちはピカピカになってきた！」

教室の隅や廊下まで拭き始める。何度絞ってもおにぎり絞りをしているだけなので、なかなか水気はなくなるらない。

これはどうきんの絞り方を教えるいい機会だと思い、バケツを持ってきて、その上で剣道の竹刀を持つようにして子どもたちこつを教えていく。

いつものことだが、予想できない展開が広がっていく。でも、その時の子どもたちの目と表情はきらきらしている。ふだんの授業でそんなわくわく感を創り出せていないのだから、こんな時間を大切にしたいいつも思っている。と同時に子どもたちの目が大きく見開くような授業をいつもできるようにしたいと願っている。

「やったあ！ 今日一番だあ！」

昇降口の扉が開くと同時に上靴を手に持ちながら教室に駆け込んでくる。

毎朝の光景である。

ランドセルから本読みカードを取り出すと、わたしの机に向かってやってくる。

「今日はどんなシールがあるの？」

「おもしろ食べ物シリーズかな。」

「昔の生き物のシールは、もうないの？」

「うん、ちよつと残っているけど、それがいいの？」

「ううん、新しいのがいい！ これにする。」

子どもたちが選んだシールをカードに貼ってあげる。いつの間にか、行列ができていく。自分の番になるとじっとシールを見つめ、「これにする！」とうれしそうに指をさす。選ぶシールは1枚しかない。数が少なくなってくると自分が選びたいシールというよりは少なくなってきたものを選ぶとする。それがなくなればもう補充はないからだ。

「人気なのはどれ？」

と必ず聞いてくる子もいる。最後の1枚をゲットした時には、

「これ最後の1枚だよね。」（見ればわかるのだが）

と何回も聞いてくる。「そうだよ」と言っておけると、うなずきながらニツコリする。

こんなシール1枚のことでもこんなに喜んでくれるなら何枚でもあげたいいつも感じる。シールの欄の前には、保護者からのコメントが書いてある。小さいスペースなのだが、「疲れているのにがんばって読んだね」「今日は一人で学校に行くことができてえらい」「本読みの声が大きくなって昨日より上手だったよ」などと励ましのコメントがある。それを読むと一人ひとりの家庭での様子を垣間見ることが出来る。教室では感じるこのできない姿なので、コメントを添えてあげたい気持ちになり、「教室でもじょうずになっっています。」「元気に遊んでいます。」と書くこともあるが、そんな時間はほとんどない。



秋休み前に『1学期がんばった会』をやった。プログラム決めで一番白熱したのがみんなでやるゲームだった。くじびきやボーリング、ばくだんゲーム、神経衰弱などたくさんある中から三つに決めた。そのあと全員の役割を決めたがくじびきの賞品係でない子が、

「係じゃないけど、くじびきの景品を、家で作ってきてもいいですか？」

「手作りならいいよ。何をつくるの？」

「折り紙で12面体つくります。」

「つくれるの？」

「時間はかかるけど、いつもつくっているからできる。」

このほかにもくじを家でつくってきたり、教室のかざりをつくってきたりして、がんばった会の1週間前から毎日のように準備に取り組んできた。

「あと〇日でがんばった会だよね！」

「全員へのくじの賞品、まだできてない」

ふだん一緒に過ごすことのない子どもたちも、同じ係になったので休み時間にいろいろと相談している。いつも口げんかの絶えない子どもたちも協力して取り組んでいる。

「あさってまで間に合わないから、明日ちよつと早く来てね！」
「わかった！」

わたしは何をするわけではないのだが、子どもたちが自分たちで会を楽しめるものにしていうとしている姿を見るのはうれしいものだ。やらされることばかりの教室では、楽しくないどころか苦痛でさえある。そんな教室に一つでもいいから子どもがわくわくする時間をつくりたい。それが『明日も笑顔で行きたくなる教室』につながるからだ。

(仙台・長町小)

明日も笑顔で行きたくなる学校② 〈小学校 中学年〉

群読、オペレッタの実践を通して 高橋 研一

1 はじめに

この原稿の依頼を受けた時、難しいテーマだと感じた。子どもたちにとって「明日も笑顔で行きたくなる学校・教室」につながるような実践を行ってきたかどうか自信がないからである。が、「今日も学校に来て良かった。みんなと……出来て良かった。」「……の学習が楽しかった。学べた。」と子ども自身が思えるような活動を一つでも多くつくろうと過ごしてきたことには間違いはない。

2 群読は楽しいぞ！

40年近く教職を行ってきたいるものの自己満足の実践ばかりが多く、人様に誇れるようなことを行ってきたというわけではないが、表現(文化)活動を通した学級(学年)集団づくりについて綴ってみようと思う。

30人3学級の4年生の子どもたち。コロナ禍の始まりの時期に入学し、好きなだけ声を出したり、歌ったりすることすら制限をされてきた。思い切って表現する楽しさを実感せずに進級



してきた子どもたちである。

この年の音楽発表会では、私の提案により詩「おまつり」（北原白秋）の群読を行うことになった。一般的な脚本はあるものの、どんな言葉を入れたいか、子どもたちの声を聞きながらアレンジをして脚本をつくることにした。子どもたちの思いは様々である。「93人みーんな仲間っ！」「休みをふやせ ふやせふやせ」「宿題ふやせ ぜったいいやだ」「たいいくふやせ ぜったいさんせい」「自由がほしい ちょうだいちょうだい」「ゲームをさせろ させろさせろ」「コロナは終われ お願ひ終われ」等々シブプレヒコールの的なものも入れた。まずまずのオリジナルの脚本ができた。困っている時、迷っている時はやっぱり子どもたちの声を聞くのが一番。思い切り声を出すことに飢えていた93人。普段は元気づき多動な子どもたちも練習に熱中した。子どもたちの表情は日増しに良くなっていく。そして、総練習、

群読「おまつり」	北原白秋	4年 組 名前	コース A(3・4校目)	コース B(1・2校目)
まつりだぞー！① (あき)	まつりだぞー！①			
		まつりだぞー！		まつりだぞー！
		まつりだぞー！		まつりだぞー！
みこしが出るぞー！② (げ)	みこしが出るぞー！②			
		みこしが出るぞー！		みこしが出るぞー！

	いじめも すどべ① わるくち すどべ②	わっしょい！わっしょい！ わっしょい！わっしょい！	わっしょい！わっしょい！ わっしょい！わっしょい！
しぐだいいふやせ③ (あき)		いやだ いやだ	ぜったい いやだ
たいいくふやせ④ (こ)		さんせい さんせい	ぜったい さんせい
ゲームをさせろ⑤ (いが)		させろ させろ	させろ させろ



本番では迫力のある群読の発表（表現活動）となった。子どもたちは「やり切った」「すっきりした」「みんなで一つになった気がした」と今までにない達成感を抱いていた。学年集団としての高まりも感じられたような気がした。子どもと共につくった群読。子どもも私も楽しかった。上記は、脚本の一部である。その後、学級、学年の団結が高まっていったことは言うまでもない。

3 オペレッタは楽しいぞ！

S市のどかな田園地帯にある全校児童39人の小規模校。当時、私が担任していたのは3・4年生複式学級9名（3年男子4名、女子3名、4年男子2名）。たった9人だが指導のしがいのある子どもたちが多かった。特に3年生は七人七様で小集団としてのまとまりは「0」に近かった。落ち着きのない子、片付けや整理整頓等の身辺自立がままならない子、トラブルを引き起こし大げさに騒ぎ立てる子、思い通りに行かないと泣きわめく子、むんづける（機嫌を損ねる）子等々。4年生の子たちは心安まらず、呆れて見ていることが多かった。

この集団（群れ）を成長させていくために、日々の継続的な取り組みや活動は欠かせなかった。何か大きなチャレンジも必要だった。価値のある活動を通して子ども（人）は成長していくし、変わっていく。そこに文化的な活動は必需品である。

ということで、運動会や学習発表会等の大きな行事で何に取り組むかは重要な課題である。ただ見栄え良くこなすだけのものでは何の成果も得られない。自分の可能性を見出し、子どもたち自身が変容し、成長していくものでなければならぬ。

中学年という発達段階と実態を考慮し新任時代に師匠の故遠藤惟也先生と一緒に取り組んだ「オペレッタくかさこじぞう」を行いたいと考えた。この教材なら、絶対に子どもたちが（思いつき切り）食いついてくるという自信はあった。いい教材（いいネタ）・質の高い文化は子どもを大きく変える力を持つ。ネ

タ7割、腕3割。こんな言葉もあるし。また、表現活動の高まりは認識面の学習と大きく関わっていることはつきりとしている。

9人ではオペレッタは難しいのだが、その年の学習発表会は1〜4年生の20人で一つの演技をとということが教育計画にあった。これならできる。夏休み前に担任4人（1・2年担任特別支援担任2人）に提案をし、以前行った「かきこじぞう」の動画を見てもらった。ぜひ、子どもたちにチャレンジさせてみたいという私の強い思いを受け止めてくれ、後日取り組むことが決定した。私自身、「かきこじぞう」への取り組みは5回目、今回が最後となるであろう。ピアノが得意なY先生が全ての曲の伴奏を引き受けてくれた（たくさん練習をしていただき、感謝）。見通しが明るかった。

しかし、子どもたちが「やりたい。」と受け入れてくれるとは限らない。休み明けに子どもたちにオペレッタとは何かという話をパワポを用いて講義し、以前行った「かきこじぞう」の動画を見せた。子どもたちは全員が取り組むことに賛成、合意してくれた。「やりたい。」「やる！ ぜったいやる。」「ばあさんやりたい。」「雪ん子やりたい。」「コーラス隊がいい。」「地蔵がいい。」「こんな声が聞こえてきた。ほっとした。

なお、オペレッタについては以下のような説明をした。

・歌がいつぱい入った劇（歌7曲） ・語り（ナレーター）がある ・体を使った表現（雪ん子の舞）がある ・道具なし ・衣装なし ・体育着 ・裸足。

※ちなみに楽譜の「梶山正人オペレッタ曲集『かたくりの花』（二葉書房）」は、絶版となり中古品でしか購入できない。）

かくして、1年生6人、2年生4人、3年生7人、4年生3人、計20名でのチャレンジが始まった。特別支援学級3人の子どもたちも一緒である。これだけ多学年が入り交じったの取り組みは私にとって初めての試みだった。しかし、子どもたち20人に対して指導者が4人。演技・表現指導については4人の先生方で分担した。以前は、何もかも一人で指導することが多かった

ので気分的に楽であった。非常に恵まれた状況だった。

遡って4月、歌の指導には苦労した。特に3年生は歌なんてものではなかった。一人の子を除き音階という文字はなく、ひたすら大きな声を出しているだけだった。コロナ禍の影響であまり歌っていない子どもたちなので致し方ない。長期の積み重ねを重視していかなければならなかった。歌に関しては、全校で取り組む「今月の歌」や教科書のもの以外に、楽しんで歌える歌を数曲教えてきた。鍵盤を弾かない私はパソコンの伴奏ソフトを用いて歌の指導を行っていた。そして9月には歌が歌として聞こえるようになってきていた。一方、1・2年生は想定以上に良い歌声を出していた。意欲が高いし、思った以上に指導がしやすいかった。

休日在家でも練習できるようにと伴奏をオンライン配信した。結構練習をしていたようである。「歌なんて歌わない子だったのに……うれしかったです。」「楽しみです。」「といった声が保護者から聞こえていた。休み時間等にも歌声が聞こえるようになっていった。

じいさんとばあさん役は、選ばれた子どもたち。当初はどちらもダブルキャストの予定だったが、ばあさま役は事情が重なり前後半通して一人で行うことになった。ばあさま役で3年生の美空さんは、教室では度々トラブルをおこし、個別の指導を何度となくしてきた子の一人である。なかなか音階通りに歌えない子でもあった。褒めまくり作戦が功を奏しソロ部分を見事にこなした。2人のじいさん役の稜さんと和人さんも持ち味を出して演じた。

コーラス隊は最終的に4人。音はとれるが声が弱かった。力のある声を引き出すまでにちよつと苦労。しかし、最終的にはこの4人の子たちが全体の歌声を支えていた。4人のうち亜美さんと大悟さんは兄弟。家でも仲良く練習をしていたらしい。



六地藏。普段は多動で落ち着きのない子どもたち。じっとしているだけでも偉かった。たくさんの餅やおかざり、大根、魚等が積まれたソリを押したり、引いたりする演技を「よいさつよいさつ」という歌声に合わせ力強く表現した。

雪ん子7人。抽象的なイメージしかないが、里にふんわりと舞う雪の様子や激しい吹雪の様子を小さな体で精一杯表現した。走り回ったり、飛び上がったたり、体を大きく揺らしたり、側転を行ったりといった感じに。練習のたびに動きがしなやかになっていったように感じた。難しかったが体を思い切り動かし表現する楽しさを実感したようだ。手のかかるもう一人の3年女子の結芽さんも大満足な表情だった。

練習を重ねていくたびに、声を出す心地よさ、歌う楽しさ、表現する喜びが身についていったように感じている。さらに、みんなと心を合わせてやる楽しさも。

当日は適度な緊張感のもと、どの子も100の力を発揮できていたと思う。振り返れば、ああすれば、こうすればと思ったことはある。しかし、一つになってやり切ったことに価値があると自分を納得させた。

以下、子どもたちの振り返りから抜粋。

(1年) 大河さん 地藏の止まったところが大変だった。(本番は) たのしみにしていた。

淳也さん お地藏さんの演技がよくできた。一緒に練習して上手になった。

雅人さん 地藏になり切るように家に帰っても一生懸命に練習した。

青葉さん みんなと雪ん子の役を一生懸命にやれてよかった。

(2年) 璃子さん きれいに歌の声を出すのを頑張った。うまいねと言ってくれたのでうれしかった。

直美さん コーラス隊で大きな声で歌えてよかった。しっかりと表現するぞ。大きな声を出すぞ。と思っ

優さん 吹雪の雪ん子の舞いを学んだ。

(3年) 結芽さん 何にも道具を使わないからできないと思っ

ていたけれどもできるんだと思った。道具がないけど分かりやすいように表現することを頑張った。

剛さん みんなの気持ちが一つになったような感じがした。雪のようにちらほらふってくるような思いで表現した。

凜子さん 衣装もなく、道具もなく難しかったけれど体で表現するから他の小学校と少し違う体験ができてよかった。

和也さん じいさんの役を精一杯表現した。剛くんの雪ん子がうまかった。

雄馬さん 金曜日になって、よいさを力強くするのをがんばった。

泰一さん 頑張ってきたことを本番でも成功させるぞって気持ちでやった。側転やせりふを家で練習した。

美空さん ばあさんのソロでうたうところを特にがんばった。道具や衣装なしは難しいと思ったけれど、最後まであきらめずにみんな頑張った。

(4年) 海斗さん オペレッタってこんなに難しいんだなあ。1・2・3年生ができていたからすごいなあと思っ

た。コーラス隊の歌、緊張した。

和人さん 衣装を着ていて本物を見ているように喜んでももらえるように表現してみた。6人目の地藏に自分の手ぬぐいをかぶせるところを上手に表現した。

4 総括も大切

やり切った後が大切で、やりっぱなしにはしない。「みんな、頑張ったねえ。すごかったよ。」で終わりにしない。どんなこ



とをどう頑張ったのか。どんな力が身についたのか。集団としてどう成長したのか。次はどんなことに力を入れていくか、等々の総括が必要である。この総括がないとリバウンドによりトーンが急降下していく恐れありである。縛りから解かれ、はじめてトラブルの連発となリかねないからである。振り返りを書くことも大切だが、私の場合「大成功の会」のようなことを行ってきた。頑張ったことを何人かの子が発表したり、デザートを作って食べたり、好きな曲を歌ったり、ゲームや遊びを楽しんだりといった内容のことを子どもたちと考えて行ってきた。大人はやり切った後に慰労会なるものを行う。子どもたちにとっても必要である。

5 終わりに

このような自己満足ともいえる実践をいくつか行ってきた。

ここ10数年、多くの学校現場では型通りにこなす「○○小スタンダード」が押しつけられ、創造的な実践が保障されない息苦しい状況にある。スタンダード最優先で子どもの声に耳を傾けることすら皆無という学校もあると聞く。しかし、そんな学校では子どもの不平や不満が何らかの形で爆発するのが落ちである。時にはスタンダード路線から外れて、子どもの思いや要求を大切にしたい実践を創っていく柔軟さが求められているのではないかと思う。より多くの子どもにとって「笑顔で行きたくなる学校」安心できる大切な居場所」にしていくために。生きる希望と勇気、自信を育む学校にしたいために。学校の主人公は子どもである。

(仙南・小学校)

明日も笑顔で行きたくなる学校③ 〈小学校 高学年〉 「バタフライエフェクト」を希望に 小野寺 浩之

長く険しい敗者復活戦が続いている。「最後までいいは納得のいく仕事をして、教員人生を終わりたい。」と、再任用になつてからも、今年も6年生を担任しているのだ。今でも組合やセンターの学習会に足を運び、勉強になるのならば、書籍を買い込み目を通す毎日である。

「全国生活指導研究協議会（全生研）」という民間の研究団体がある。私も新任の頃から加入し、集団づくりや自治活動の在り方について学んできた。全生研の会員の実践は、今でも私に大きな示唆を与えてくれている。隔月に1度、全生研の機関

誌である『生活指導』が送られてくる。待ち望んだ『生活指導』（10・11月号）が届いた。早速目を通す。が……、タイトルを見た途端、何とも言えぬゲンナリ感が自分を襲う。あれほど待ち望んでいたのに、ページをめくる気にならないのだ。『明日も笑顔で行きたくなる学校』？……「学校は行きたくならないとダメなのか。渋々行つた方がいいじゃないか！」どうして「笑顔」でないといけないのだろうか？ これらのことが瞬時に脳裏をよぎっていく。

私が担任している6年生のほとんどの子どもは、中学受験や

塾、スポ少や習い事で疲れ果て、ほとんどの子どもが眠い目をこすり、浮かぬ顔で学校に来ているのだ……。」「楽しく学校に来なよ!」「笑顔で過ごそう!」などとは、とても言える雰囲気にはない。機関誌のタイトルそのものが現実と乖離しているのだが、あえてこのタイトルを今掲げる意味も分からないではない。不登校の子どもが35万人を超えてしまった今だからこそ、学校に喜びと希望を取り戻し、子どもたちが「明日も笑顔で行きたくなる学校」を模索し、閉塞した学校・教育に風穴を開ける実践を行うことが求められているのだ! と思い直し、機関誌に手を伸ばしたのだった……。

「学校は歯を食いしばって来るところじゃないよ。疲れたり、気持ち的に辛かったりしたら休んでいいんだよ。いつでも保健室に行つていいからね。」

私のクラスの子どもたちは、私のこの言葉を最大限活用して、ちよくちよく学校を休む。私のクラスではこのような休みの日を「リフレッシュ休日」と呼んでいる。保健室は私のクラスの子どもたちが常にたむろしている。養護教諭も理解のある人で、楽しそうに子どもたちの話に耳を傾けてくれる。今の学校はいるだけで心が削られる。意味を問うことなく、分刻みでやることが決められている。それに加え「同調圧力」と「ゼロ・トレランス」で気遣い、気苦労の毎日だ。こんな現実だからこそ、どうしても「心と体が安らげる時間と場所」が必要となる。定期的な欠席と保健室は、子どもたちの安全装置となっているのだ。「明日も笑顔で行きたくなる学校」になるためには、まずは学校の中に安らぎと安心が多様に保障される場所が不可欠となる。教室に足が向かない子どものために、今後、ますます多様な教室の在り方を教職員が知恵を集めて工夫しなければならぬ。人間、病氣したり、疲れしたりしたら休むものなのだ。無理をすることはない……。

笑顔かどうかは別にしても「明日も行きたくなる学校」は教師が模索するだけでなく、子どもたち自らが考え創っていくこ

とが何より大切なことである。与えられるだけではなく、子どもたち自らが、行きたくなる学校を創る術、創り変える術を身に付けていくことが肝要となる。閉塞した学校、生きづらい学校を乗り越えるキーワードは「自治」であろう。「日本国憲法」と「子どもの権利条約」をよすがとし、学校を自分たちがより楽しく、より幸せになる場所に創り変えていく体験の一つでも多く味わわせたいと思う。このことが成功体験となり、将来、この社会はみんなで力を合わせれば、自分たちの思いをかなえる世の中に創り変えることができるという確信に結び付いていくのである。そこに至るためには「原案作成の仕方」「討議の仕方」「リーダーやファロアーの役割など」教えることは多様にある。子どもたちの願いに耳を傾け、子どもたち自らが、その願いを要求として立ち上げ、願いを実現する権利行使の主体にしていくのだ。

とはいえ、その実現は決して容易ではない。時間もかかるし、子どもの成長は行きつ戻りつ、ジグザグだからだ。でも、あえてそれを承知で、小さな一歩を積み重ねていくしかない。やがて、大きなうねりとなることを信じて……。

「あれ、何か、コンクリートの壁がある!」「こっち側はスポンジみたいなのが埋まつてる!」大騒ぎしながら、業間休みの校庭の砂場で、素手や軍手でひたすら穴を掘っている6年生の集団がある。数分も経たないうちに、何事かと黒山の人だかりになり、1年生などは目的も分からぬまま、一緒に穴掘りを楽しんでいる。

「幸せ計画」と呼ばれた学級行事の取り組みは、国語の説明文「プレゼンテーションをしよう」の授業が発端であった。どここの学校でもそうであるように「学校スタンダード」が幅を利かせ「ゼロ・トレランス」で子どもたちは管理されている。(本当はやりたくない。何でこんなきまりがあるんだよ。)という



大多数の子どもたちの心の叫びは、教師と教師の思いを付度する、一部のいわゆる「いい子たち」によって聞き流されていくのだ。

教科書では「より良い学校を作る」として「1年生が校舎内で迷わないように案内板を作ろう」とプレゼンされている。案の定、子どもたちの興味を引くことはなかった。

授業では「世界の幸福度ランキング」を提示した。何をしている時に幸せとを感じるのか？ 学校は幸せを感じる場所になっているのか？ 幸せは作ることができるのか？ 社会の授業で学んだ「日本国憲法」や「子どもの権利条約」の意見表明権とも関連させ、子どもたちが幸せになれるような学校はどうあるべきかについて、何度も話し合いを持った。教師が一方的に決めた学校のルールに、それほど疑いを持たず、従順に従っていたと見えた子どもたちも、その内側に、ああしたい！ こうしたい！ 本当はこれはやりたくない！ なぜしなければならないの？ という思いを強く持っていたのだ。

「教室でみんなで映画を観たい！」「1日中、自分たちが決めた自由時間割で過ごしたい！」「みんなで卒業旅行に行きたい！」……「屋上雪合戦」「カラオケ大会」「仮装大会」「お菓子作り」……子どもたちは堰を切ったように思いを語り始めた。「何でシャープペンはだめなの？」「担任の先生の許可がなくても、他の教室に自由に入れるようにしたい！」自分たちがやりたいこと……、本当はやりたくないこと……。子どもたちの話を聞き取るには1時間では時間が足りず4時間にもわたった。そこに教育的な価値があるのかなど問う必要はないと考えた。子どもたちが自分の考えや願い、夢を語り合い、友達と合意を創れば、実現に向けて正当な手順を踏めば学校は創り変えていくのだ！ という意識と体験を持たせたかったのである。

最初に紹介した「穴掘り大会」も「砂場の底がどうなっているのか、1年生の時から気になっていたんだよね。卒業するまでに確かめてみたい！」という良太の思いが実現したものである。やんちゃな男子たちの賛同が得られ、学級の合意とな

り、良太が予想もしなかった数の参加者と共に実行に移された。「スコップで掘ったらどうか。」という私のアドバイスを一蹴し「やっぱ、手で掘らないとね。」と言って、ほとんどの参加者は、土の感触を楽しみながら素手で掘っていった。結果「砂場の深さは60cm！ 四隅はコンクリートで覆われ、底面にはスポンジが敷かれていました！」という事実を、少しドヤ顔で学級のみんなに報告する良太の姿があった。

多忙な学校の中で、子どもたちの願いを丁寧に聞き取り、思いの実現に向けて、徹底的に寄り添い、付き合う時間を保障することは、教師には覚悟のいることだ。「学校特有の学校でしか通用しない常識」や「学年の足並みを揃える」ことが、子どもたちの願いを、いとも簡単に跳ね返すことも少なくない。しかし、だからこそ、学校に風穴を開けることが求められる。ある意味、全生研の会員のみならず、組合やみやぎ教育文化研究センターで学んだ教師の順番が、今こそ求められているのだ。

「砂場の底を見てみたい！」というたつた一人の良太の思いは賛同者が集い、「発議↓原案作成・提案↓討議・合意形成」を経て実現へと動いていった。この「穴掘り大会」は同様の手順を経て、学級の「カラオケ大会」「仮装大会」「ベガルタ観戦」「映画鑑賞会」「お菓子作り」「屋上雪合戦」等々の実現に広がっていった。「卒業旅行」は「学年の卒業遠足」に形を変えたが、学年総会で可決され、子どもたちは卒業前に「八木山ベニランド」を満喫することになった。

「バタフライエフェクト」はある。一人の思いが、やがて他者の賛同を得て、大きなうねりとなり、学級変革・学校変革、そして社会変革につながるのだ。これらの実践の積み重ねが「明日も笑顔で行きたくなる学校」にきつと結実するに違いない。担任した子どもたちが、このことを証明してくれたのである。今の学校が「明日も笑顔で行きたくなる学校」に変わる希望はある！

(仙台・小学校)

明日も笑顔で行きたくなる学校④ 〈中学校〉

お互いの「笑顔で」を耕せる

人・学級・学年・学校に

千坂 朋広

1 他者の心情や社会状況に

関心を寄せられることを願って

特集テーマの「笑顔で」には、「笑顔にしてくれる他者と場所」の存在が内包されていると感じる。先日、公表された文部科学省「2024年度の児童生徒問題行動・不登校調査」が示す子どもたちの声なき声は、「学校が特集テーマとは真逆の状態にある」ことを物語っているのではないだろうか。

さて、勤務していた中学校は学年6クラスある。私は学年主任を務めていたので担任はしていないが、全クラスの担任という意識を持ちながら、学年職員と学年づくりに努めていた。その際、学年会議を通じて大事にしてきたことは、職員同士の子ども理解を平準化すること、学活や総合や道徳の時間は自分や社会に目を向けられる時間となるように意識すること、単に行事の準備をするにしても「何のために行うのか」を大事にできるようにすることである。その中で、1・2年生時の学年道徳の実践について、学年だよりでの生徒の感想と私のコメントを抜粋して紹介したいと思う。

学年道徳を行ったのは11月である。なぜなら、仙台市内の小中学校は、その月に市教委事業として「いじめ防止『きずな』キャンペーン」を行っているからだ。その期間を活用し、1年生時（2023年度）は『聲の形』、2年生時（2024年度）は『青い鳥』の映画鑑賞会をした。

冒頭調査が示すように、本校でもいじめ・不登校は存在するし、トラブルもある。子どもたちは「いじめはいけない」ことは分かっているけれども、行ってしまう実態がある。不登校生徒は「行きたいのに行けない」という葛藤や「行きたい場所ではない」という思いを抱えているけれども、環境問題よりも本人問題が優先されてしまう実態がある。だからこそ思春期に生きる子どもたちには、「人は人によつて傷つけられるが、一方で人によつて救われる」ということを伝えたいし、体感・体験できるような日々を学習や生活を通して過ごしてもらいたいと願っている。映画には、同世代の子どもたちが登場する。その子たちの心の機微が、子どもたちの日常と重なり、子どもたちの心や他者・社会に関心を寄せられることにつながっていくことを願って取り組んでみた。

2 アニメ映画『聲の形』（大今良時 原作）

この映画は、ある小学校に転校してきた先天性の聴覚障害を持った西宮という女子に対するいじめと、いじめてしまった将也という男子と、その周りの子どもたちの葛藤と成長が描かれている。鑑賞する際、『思いを伝える・思いを聴き取る』ということ、『人を理解する』とはどういうことか考えよう』という視点を提示した。

◆Cさん いじめは、環境で大きく変わるなと思った。いじめ

てた人が悪いのはもちろんだけど、それをただ見てた人、被害者ぶる人（この映画だと川井）、こういう立場の人もしじめに関係ないとは言えなくて、そもそも環境はそこにいた人で変わっていくものだから、それを変えられるのはこういう人たちなんだと思う。けれど、この作品でもあったように、環境はすぐに変えられるわけじゃなくて、人が他人の気持ちを理解することで変わっていくんだと思う。障害を持つている人にしか分からないことや、感情を分かろうとするのは難しいけれど、手話を通して思いを伝えようとしている石田が、小学校の頃と比べてとても変わったなと思った。

←
《先生から皆へ》

Cさんは、「環境を形作るのは人であり、かつ作り変えるのも人なのだ」ということに言及している。この時大切なことは、「どんなことを大切にして環境（集団・社会と置き換えてもいい）を作っていくか」だと思う。

Cさんのこの視点は、とても素晴らしい視点だと思うと同時に、先生たちも含め、皆には「すべての人にとってより良い環境を形作ること（作り変えること）に参加しているか」という問いを投げかけたい。これを放棄することは、一部の人の考えや利得によって社会が構成されることを容認することと同義になると、先生は思う。映画で言えば、西宮へのいじめに対して容認するというメッセージを発しているということだ。人は誰しも、何かしらの環境（集団・社会）の構成員である。この視点を忘れないように持っていたいと思う。

◆Aさん 石田将也が西宮硝子をいじめていたように、自分のクラスでもいじめが起きていて、自分が周りにいる人だったら、いじめっ子に逆らうことが怖くて、いじめはだめだと知っていても、自分の気持ちををはっきり伝えられなさそうだなと思いました。耳が聞こえないだけでいじめたり、仲間はずれにしたりするのは良くないと思いました。周りにいた人たちは、勇気を

出していじめを止めるべきだと思います。これはアニメだけど、身近な所でもこのようなことは起きないわけではないので、これから、いじめを起こさないように気をつけて生活したい。

←
《先生から皆へ》

勇気を出して止めることの大切さに気づいている一方で、集団の中では自分に矛先が向くことに恐れを感じるということが記されている。記載されていることは正直な思いであり、誰もが善悪の狭間で葛藤するのも事実だ。しかし、そこで、人を大事にしないことに憤りを感じて行動する人もいるし、自浄作用を働かせて、いけないことを正すことができる集団もある。つまり、人に優しい集団や社会をつくるのは、やはり人なのだ。皆には、そうなってほしいと思う。

3 映画『青い鳥』（重松清 原作）

この映画は、いじめ自殺未遂が起きた中学校のクラス担任の病休代替として赴任してきた吃音の村内先生と、子どもたちの交流を描いたものである。キャンペーンの時期であることから、本校の各クラスでも「防止のためにどうすればいいか」の思考をめぐらし、話し合ったり、取り組んできたことを振り返ったりしていた。こうした時宜を踏まえて、映画と自分たちの日常を重ねて考えてみるという視点を提示して鑑賞した。

◆Bさん 苦しいとき、辛いとき、弱っているとき、平気なふりをするのが上手な人ほど抱え込んでしまうから、お互いに支え合える関係をつくれるようになりたい。多数派であることが悪いわけではないけど、自分の行動くらいは自分で決



めたいと思った。他人事にしている人たちがたくさんいて、「その他の人たち」が無関心に黙る（空気に合わせる）のではなく、一人でも勇気を出していれば、また結果は変わったのかなと考えた。

◆Dさん 「青い鳥」を見て、人それぞれ違うことが分かった。話すときに詰まってしまう人や、ふざけながらでしか話せない人など、一人一人違っていい。だからこそ相手の気持ちを考え、一つ一つの言葉や行動に責任をもたなくてはならない。「自分は大丈夫」「これくらい……」などといった曖昧な気持ちが、気づかぬうちに相手を傷つけてしまうことが分かった。

←
《先生から皆へ》

一年生の時、「自尊心」という言葉を学習したことがあったと思う。「大人に近づくにつれ、自分で判断し行動しようとする。そして親とも対立が起こってくる。子どもから大人になる上で誰もが通る道で、成長の証でもある。重要なことは、自尊心が育つほど、自尊心の「傷つき」を他人に知られたくないと思うものであるということだ。だから、本当の気持ちをふざけて伝えたり、人前で恥ずかしい思いをしたくないから言えなかったり、笑ってゴマかしたりなど、気持ちと表現が乖離する。ゆえに、「いじり」は時として、罪深いことになる。しかし、そんなテレビ番組等がいかに多いことが。

誰か一人でも、内面を打ち明けることができる人がいることが大切だ。だから、あなたが、他者にとってそういう人になろう。

◆Eさん 大勢からいじめを受けたり、信頼していた友達から嫌がらせを受けると、嫌なことも嫌だと言えないし、人に相談しにくくなって、一人で悩んでしまつて自殺をしようとしてしまふのではないかと思った。もし自分がいじめられた時に、相談をする相手がいるのといないのでは、かなり違うと思った。だから、自分が相談しやすい人間になりたいと思った。また、いじめを見たときに、迷わず助けに行けるような人間になりたい

い。

◆Fさん 自分たちの日常生活に置き換えてみたが、自分たちも友達に「これやってみる」や「これできる？」みたいなじりなどをやらせている。自分がいじめだと思っていなくても、相手は傷ついていて、いじめが起きているということだから、改めていじめの怖さを知ることができた。

←

《先生から皆へ》

「止めたい」、「伝えられない」、「いじめられたらどうしよう」、どれもその場に直面したら、人間なら沸き起る感情だ。だから、忘れようとするし、見ないようにする。けれども、人は人の中でしか生きられない。必ず、何かしらの集団に属している。その集団を、そこにいる人たちがどう創っていくかが重要だと思う。温かみのある横のつながりを大切にしていこう。

4 おわりに

人間は誰しも、「弱さ・強さ・狡さ・優しさ」を併せ持っている。自分を客観視できるようにすることは成長の証でもある。しかし、自分を見つめることができるようになることは、つらいことでもある。自分の長短含めて自分であると受け止められることで、自分をいたわることも、他者をいたわることもできるようになっていくのではないだろうか。学校は、そうした成長を保障できる場でありたい。

（仙台・中学校）



●教育時評

学習指導要領

次期改訂の構想と

問題点

本田 伊克

1. 次期学習指導要領

改訂に向けた審議の状況

2024年12月に文部科学省は、中央教育審議会（以下、「中教審」）に、次期学習指導要領改訂に関わる諮問を行った。諮問事項は、大きくは4点である。（1）現行指導要領のさらなる構造化と内容の整理、（2）これからの時代に育成すべき資質・能力を踏まえた各教科等の目標・内容の検討、（3）多様な個性や特性、背景を有する子供たちを包摂する柔軟な教育課程の創設・改善、（4）教育課程の実施に伴う負担への対応である。

2025年9月25日に、中教審教育課程特別部会は、「論点整理」を公表した。

論点整理に示された「今後の検討スケジュール・検討の在り方等」（104～110頁）によると、遅くとも2026（令和8）年夏頃までに教育課程部会の「審議まとめ」を出し、同年中に中教審答申を取りまとめるとされている。特別部会の下に設置されている「総則・評価特別部会」（義務教育検討チーム）「高等学校検討チーム」（義務教育のイニシアティブを取り、各WG（ワーキング・グループ）（幼児教育）「特別支援教育」「産業教育」

「国語」「外国語」「社会・地理歴史・公民」「算数・数学」「理科」「体育・保健体育、健康、安全」「芸術」「家庭」「生活、総合的な学習・探究の時間」「特別活動」「道徳」「情報・技術」「不登校児童生徒に係る特別の教育課程」「特定分野に特異な才能のある児童生徒に係る特別の教育課程」における議論が、教科・校種等に「閉じた」ものにならないようにする旨が示されている（105頁）。これを受けて、9月下旬から、総則・評価特別部会および各WGの検討が開始されている。

論点整理からは、教育に対する政策による統制を一層強める方向性を読み取ることができる。そもそも、2006年に「改正」された教育基本法第17条「教育振興基本計画」で、内閣府が教育の大きな目標を予め定め、網をかける構造が出来上がってしまった。首相官邸や内閣府と、グローバル大企業を中心とする経済界（「財界」）とその成長を推進する経済産業省が、教育にも様々な会議体等を通じて口出しし、中教審にはその審議の方向性や内容について、予め縛りがかかっている。いっぽう、文部科学省は、学校現場に対する管理と統制は手放したくない。教育政策の審議・決定プロセスが大きく変わっているのだ。

こうした点を踏まえて論点整理の全体を俯瞰すると、その基調は、教育機会の均等を保障することを実質的に放棄し、地域ごとのある種の多様性を容認しつつ、全体としては公教育を縮減していく意図が見えてくる。次期学習指導要領に示される方向性、目標・内容などを予め知らせ、馴らせ、抵抗感を少なくして、スムーズに受け入れさせるよう、「想定外」の議論や論点は、特別部会の審議の過程で出し尽くされ、それを整理したということにしたいのだ。そして、論点整理の基調は、改めて「資質・能力」を打ち出し、子どもたちが「自ら（あるいは「自分たち」）の責任」で

教育の成果を出すことを求めるものである。

2. 「論点整理」が示す

次期改訂案の問題点

以上の点を踏まえた上で、論点整理にはいかなる問題が見られるだろうか。

①子どもの「自己責任」論が基調

論点整理には、「変化が激しい時代において、主体的に自らの人生を舵取りしていくためには、思考や行動の終点がひとつに定まっていけないような課題や状況に対して、培った資質・能力を活用して初発の思考や行動を起こしていくことが必要。このことは一人一人の個性的な人生形成の基礎となる」という見解が紹介されている（17頁、ルビは筆者）。

ここで気になるのは、「初発の」ということばの意味合いである。「変化が激しい社会」のなかで、「思考や行動の終点」をそれぞれに見出し、そこに向かつていく思考や行動の「初発」の契機はどこに見出されるのだろうか。「生きる力」が示されて以降の日本の教育政策の流れに今回の論点整理を位置づけてみると、そこに示された「ウェルビーイング」や「主体性（エージェンシー）」の獲得は子どもや家庭の「自己責任」論を前提にしたものだと思わざるを得ない。

②「2階建て」の教育課程構想

「柔軟な教育課程の創設・改善」については、「柔軟な教育課程編成の促進（小・中学校の全体イメージ）」図（46頁）は、「1階」部分で「学校として編成する教育課程の柔軟化」（ここでは、「学校」が強調されている）を、「2階」部分で「個々の児童生徒に着目した特例の新設・拡充」（ここには「個々の児童生徒」が強調されている）を提案している。

「1階」と「2階」の行き来は否定されていない

が、「2階」については、「効率的」なターゲットに絞った限られた財源の競争的・重点的配分の仕組みによって各地方自治体の教育予算が削られる現在の状況では、家庭の経済的条件などによって子どもの教育機会の選択肢の幅や質が左右されかねない危険がある。

③改善されない教師負担

「教育課程の実施に伴う負担への対応」についてはどうか。論点整理は、「学校」が主に担う「1階」部分については、教師が担当する授業コマ数が多すぎるという問題を意識して、「教育課程特例校」や「授業時数特例校」制度等によらず、より柔軟な授業時数のやりくりを可能にすることを提案している。標準授業時数1015単位時間から「調整授業時数」を生み出し、調整授業時数を特に必要な教科に「上乘せ」(その分他の教科時数を縮減)したり、「裁量的な時間」に宛て、「特に必要な教科の開設」や「授業改善に直結する組織的な研究・研修」に充てたりすることを可能にすることを検討している(46頁)。

だが、本年(2025)年6月の給特法(公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法)改正は、現在4%の「教職調整額」の10%への漸増、主務教諭等の創設、「時間外在校等時間」の月30時間程度の縮減をすずに止まり、教職員定数の十分かつ安定的な確保も、教員の職務についての抜本的な見直しもないものである。こうした状況では、各学校は「カリキュラム・マネジメント」という名の、苦難と苦渋に満ちた時数のやりくりのみをさらに強いられる可能性が高い。

④「キーコンセプト」と

「キーワード」の混乱

「現行指導要領のさらなる構造化と内容の整理」と「これからの時代に育成すべき資質・能力を踏

まえた各教科等の目標・内容の検討」については、論点整理の「キーコンセプト」あるいは「キーワード」(?)に混乱や無理な図式化が見えられ、教育現場にさらなる混乱をもたらしかねない点が危惧される。

論点整理は、次期学習指導要領に向けた基本的な方向性の一つとして、『主体的・対話的で深い学び』の実装(Excellence)を掲げている(3頁)。ここでは、「深い学び」に重点化した方向性が示されている。

そして、「新たな観点別評価の方向性イメージ」(77頁)で、各教科についてABCの三段階で評価する「観点」から「主体的に学習に取り組む態度」を外して「知識・技能」「思考・判断・表現」の2観点とする方向性が示され、「教師が『深い学び』を実現する授業のイメージを掴み取りやすくする」(9頁)ためのモデル図案を提示している(12頁)。

総則・評価特別部会で、これまで使ってきた用語を用いた若干の文言整理が提案されているが、イメージ図のわかりにくさは全く改善されていない。

「資質・能力の深まりのイメージ」として、(a)「知識・技能の深まり」と、(b)「思考力・判断力・表現力等の深まり」と、(a)(b)それぞれの関係が示されている。だが、そもそも「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」という観点を自明のものとし、教科・領域等の目標・内容、知識とスキル(技能)、あるいは技術の固有性を軽視していることは大きな問題である。

「主体的に学習に取り組む態度」を外すとしながら、「思考・判断・表現」の過程で、「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」「学びの主体的な調整」「他者との対話や協働」が「特に表出」した場合は「思・判・表」の観点別評価に「○」を付

記するとしている。教師にとつては、「2・5観点」ともいうべき割り切れなさと戸惑いを残すのではないか。

さらに、教科等横断的に培われる「学習の基盤となる資質・能力」について、「問題発見・解決能力」については明示しない(61頁) いっぽう、「情報活用能力」については、小学校で総合的な学習内への「情報の領域」追加、中学校で「技術・情報科目(仮称)創設、高等学校で情報科の一層の「充実」の方針が示され、重点的な扱いとなつている。こうした新たな内容の追加と、教育課程全体のバランスとの関連はどれだけ考慮されているのか。

3. 指導要領改訂にどう対峙すべきか

学習指導要領の「完成」に向けて、「論点整理」と「参考資料」に散見される矛盾や争点は、「二つの方向に整理・統合」されて、「何かしら一つの貫いた形になったもの」が示されることになるであろう。そしてそれは、内部に矛盾や破断を含みながら、全体としては、教育の目標を政府や財界がさらに管理する仕組みの中で機能していくことが懸念される。

だが、教育は目の前の子どもたちの成長と発達のためにこそある。教育とは、人間が生きていることそのものに深く関わる営みである。大人も答えをもちえない社会のなかで、子どもたちが教育を通じて何を獲得し、どんな力を発揮するかは、かれら自身に委ねられるべきことである。そのことを踏まえて、教師たちが目の前の子どもとの育ちに伴走し、かれらが人間の作り上げてきた学問・文化・芸術を学ぶことを通じて、新しい知識・価値、関係、行動を身につける過程と、それに伴う喜びや驚きの瞬間を生きることを大切にしたい教育課程づくり、授業づくりの営みを応援したい。

(宮城教育大学)

サークルは一番の学びの場！

渡 邊 浩 一

ある日のサークル その1

金曜日の午後7時。今日のレポーターのH先生（4年目）がやってくる。

「すみません。遅れました。」さっそくレポートの報告に入る。

5年生の男子の問題行動で困っている。

「いつも決まった友達を叩いたり、蹴とばしたりしています。何か、自分の思い通りにならないことがあると『死ぬ』『ぶざけんな』と言って壁をけつたりランドセルを殴ったりしているんです」「授業中は、後ろを向いたり、関係ないことを言ったりして、掃除もほとんどやらないでさぼっているんです。」「注意しても『ハッ?』と言って真面目にきかないし。」「運動会の騎馬戦は練習も適当にやっていたんです。でも、周りの子どもたちが『こそ練』をして夢中になりましたら、『先生、俺も騎馬戦の場所を変えていい?』と言って本気で取り組むようになったんです。」「これまでのことを一気に話した。サークルのみんなでそのレポートに共感したり質問したりしながらその子の分析と見通しを話し合う。」「暴言はその子の問題にしないで、学級で暴言について話し合いをしたらどうだろう」「騎馬戦がどうしてうまくいったか学級で総括することが大事でないかなあ」など。H先生と一緒に学ぶことができた。H先生も「やってみます!」と言ってサークルを終えたのは午後9時近くだった。

サークルでは具体的な事例を通して子どもたちの行動を分析し、子どもへの関わり方を考え、民主的な学級集団を作っていくための方法を実践的に学んでいる。

ある日のサークル その2

K先生が、紙袋から木魚を取り出した。そして、

手づくりマイクも握った。

「ポクポクポク」「電車 馬車 自動車。人力車 自転車」「食欲旺盛 五年生。休日 宿題 不必要」「中略」「カーン。（拍手・笑） 阪田寛夫さんの『お経』にアレンジを加えたもの。木魚は自前。言葉は子どもたちと話し合って決めたもの。学級で楽しんでやっている実践紹介。続いて北原白秋の『まつり』もアレンジを加えて紹介し参加者で群読した。文化活動（歌、ダンス、音読など）は子どもたちの体と心を解放し、自分を表現する楽しさを味わわせることができる。身体が解放されることで友達との応答が滑らかにできると思う。楽しく、価値のある文化活動を学んでいる。

ある日のサークル その3

H先生が紙を出した。「これ、やってみましょう。□に文字を入れて言葉がたくさん作ってください。これは5分でいいかな」

（写真）

「ペーパー」「ローラー」「ガーター」など

「さすが。次は3文字です。これは、班の人と話し合って多く見つけてください」

初めはなかなか思いつかないが……見つかるとうれしい。

「シーフード」「キーボード」「ピアー」

集団あそびは、友達の意外ないい所を見つけたり失敗を許し合える雰囲気を作ることができ友達関係を良くする。サークルでは、いろいろな集団遊びを学ぶことができる。

このように、私たちの白石サークル（しゃべり場）は、レポート分析、文化活動、集団遊び、そして何より参加者のおしゃべりを通して子ども



もたちが安心できる民主的な学級集団づくりを学ぶサークルです。

青年教員の声

忙しい中をサークルに来る若い先生たちがいる。この機会に先生たちはどうしてサークルに来るのか。声を聴いてみた。

Iさん(20代)

まず、自分の困っていることや悩んでいることを相談して、新しい視点を得ることができるところです。それから、職場と違って周りの目を気にしないでしゃべれるのがいいと思います。腹を割って本音で話せるのがいいです。

Nさん(30代)

参加していいことは、学級経営や子どもとの関わり方についての悩みを相談し合えることです。他校で働くさまざまな立場の先生方と話すことで視野が広がりました。忙しくても、サークルに行きたいと思うのは、信頼する先生方と意見を交わしたり実践紹介を聞いたりすることで「子どもたちとこんな授業をしたい!」「こんな関わりをしたい!」という明日へのエネルギーになると感じるからです。

Yさん(20代)

先生方と学級経営に関する悩みを共有したり、アイディアを出し合ったりするのが私にとってのサークルに行く理由です。授業については、学校や研修で指導していただく機会が多くありますが、学級づくりとなると学ぶ機会が少なく、自分のやり方が合っているのか不安になることがあります。そんななかサークルで先生方の取り組みを学習することで、自分の学級づくりを改善するきっかけになりました。また、担任している学級や子どもたちのことをレポートにまとめることで、それまで気付かなかった視点や問題ば

りだと思っていた子どもの良さを見つける機会になることも多くあり、頭の中で考えるよりもすっきりした気持ちになります。

Hさん(20代)

教員になって1年目にサークルに初めて参加しました。大学で勉強してもいざ、授業すると思うようにできず、何から勉強すればよいか困っていた時に参加して、大学では学べなかった教材、クラスの仲を深めるレクリエーションなどを知ることができました。サークルでは次の日からすぐに実践できるものばかりだったので仕事に忙しくても参加して良かったと毎回感じます。また、抱えている生徒指導について、サークル全体で解決法をじっくり話し合う時間もありサークルを終えた後は心が軽くなったり、また明日から子どもたちとしつかり向き合おうと思えました。今後サークルに参加したいと思います。

サークルに来て、「心が軽くなった」「明日へのエネルギーになる」という声を聞くとサークルを開いて良かったと思える。「自分のやり方が合っているか不安になる」というのは共感できる。学級は教師のはたらきかけで成長していく(民主的になっていく)から、教師はその方法を学んでおいたほうがいいし、サークルや民間教育団体で学ぶことが一番だと思う。サークルはぶっちゃけ本音で言えるのが一番。それが、最高の魅力。声を寄せてくれた先生方ありがとうございました。

白石サークルのあゆみと

これからのサークル

白石サークル(しゃべり場)は宮城県生活指導研究協議会(宮生研)の白石支部のサークルである。私個人としては、およそ30年前にサークルに参加し遠藤惟也先生や仲間たちから学級づく

りや授業作りを学んだ。困った時、悩んだ時、「サークルに行けば何とかなる!」と思いながら参加してきた。参加者が少なくなっただけで中断期間もあったが、「継続が一番」と言い聞かせ、ほぼ毎月1回のペースで開催している。

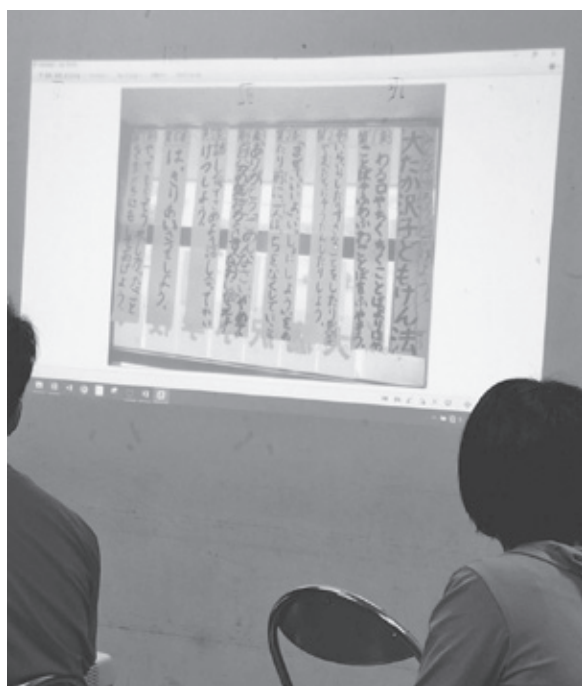
しかし、サークル運営はなかなか難しい。レギュラーで参加してレポート報告をしてもらえるのが理想だが、忙しいのが分かっていて頼めないなあと思ってしまう。初めての参加や久しぶりの参加者が現れるとうれしいのだが、続けて来てくれるのは稀だ。チラシを作る時に、サークルの内容をどうしたら良いのか? 先生たちが求めている学習は何なのか? いつも悩むところである。でも、「サークルは一番の学びの場」と言い聞かせて、次のサークルに向けてチラシを作っている。

若者よ、サークルに行こう!

ベテランよ、

若者を誘ってサークルに集おう!

(仙南・小学校)



計算で求めた 0.4 倍をテープの操作で、「なるほどそういうことか」と実感させます。

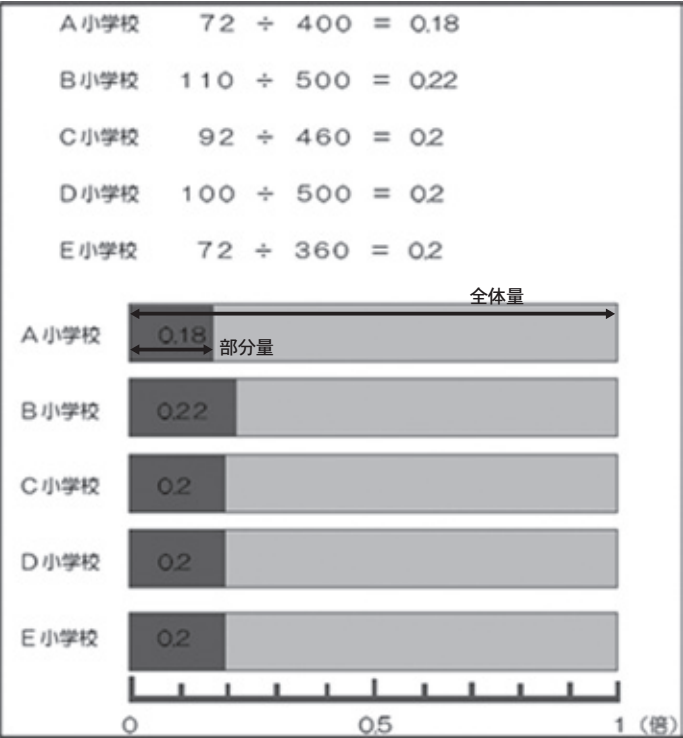
●イメージがわく量で割合を考えさせる

割合の授業の第1時を「リサイクルできるゴミの割合」で始めます。ゴミ処理が大きな社会問題となった30年ほど前の教科書はゴミのリサイクル率が第1例題でした。現行教科書のシュートの成功率よりリサイクルできるゴミの量の方が大きさをイメージし易いと同時に、全体量から部分量を見る割合の問題として適していると考えています。割合を考える場合に大切なことは、B小とD小のように全体量が同じであればリサイクルできるゴミの重さで比較でき、A小とE小のようにリサイクルできるゴミの重さが同じであれば全体量で比較できる例題を用意することです。そして、A小とB小のように基にする量と比較する量の両方が異なる2校を比べるには他の方法を考えなければならないと進めます。

5年算数 比べ方を考えよう（ ）

A, B, C, D, Eの5つの小学校で一週間のゴミの量を調べました。どの学校がゴミをリサイクルできる割合が多いといえるでしょうか。

	学校全体のゴミの量 (kg)	そのうちリサイクルできる ゴミの量 (kg)
A 小学校	400	72
B 小学校	500	110
C 小学校	460	92
D 小学校	500	100
E 小学校	360	72



「単位あたり量」で人口密度や収穫度などを学習しているし、小数の倍で割合的な見方を扱っているの、子どもたちは全体量（基準量）から見てどれくらいリサイクルできるか（比較量）を計算して比べればよいと考えるでしょう。つまり、ゴミ 1kg あたり何 kg リサイクルできるかをわり算して比べるアイデアです。このようにして、リサイクル率を求める割合の問題を考えて、計算方法を導きます。

リサイクルで
できるゴミの量
(部分量)

÷

ゴミの量
(全体量)

=

割合

と左図のように小数倍（1kg あたりの割合）を求めて比べられることを理解させます。つまり、ゴミ全体から見てリサイクルできるゴミの量がどれくらいの割合かがわかり、小数倍の数値で比較できるとまとめます。

そして、図式は全体量から部分量を比べるので2量並列ではなく、左図の帯グラフのように見える図式が適していると思います。

割合と小数の倍は概念的には同値で、割合の本質は小数倍だということも気づかせます。とはいえ、「割合」は主に全体量から部分量を見て比べるので、その値は1以下（0 < 割合 < 1）になり、小数倍を100倍して表す「百分率」も扱うゆえに、「小数倍」とは区別して（3年や4年で扱わずに）5年で教える方がいいと考えています。この第1例題で割合の基本的な考え方が理解できれば、これを基にして教科書の適用問題や練習問題が解けるようになると思います。

【詳しい資料は、みやぎ教育文化研究センターまで】
(仙台・七郷小)

「小数の倍」と「割合」における 2量の操作（5年生）

林 和 人

●「小数の倍」は実寸長のテープで可視化する

東京書籍版教科書の「小数の倍」は青のリボンと赤のリボンの長さを比べたり、道のりを比べたりして小数倍を計算させます。しかし、この課題では長さを比較する必要感がないので、あまり記憶に残りません。そこで、私は子どもたちが比べたくなるものとして『となりのトトロ』の場面を提示しています。大トトロの身長とクスノキの高さや中トトロや小トトロの身長を比べて何倍かを計算させます。例えば、「大トトロの身長は 2.3m で、中トトロの身長は 0.92m です。中トトロの身長は、大トトロの身長の何倍でしょう」という課題で考えさせます。この場合は、

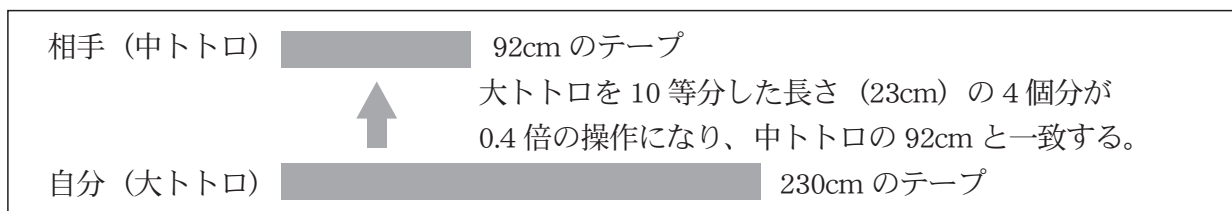
$$0.92\text{m} \div 2.3\text{m} = 0.4 \text{ (倍)}$$

なのですが、子どもたちは $2.3\text{m} \div 0.92\text{m}$ と計算しがちです。このつまずきをもとに「どちらからどちらを比べているのか」を考えさせ、自分から相手を見ている向き（方向性）を矢印で示しながら、「○は□の何倍ですか」の基本文では□が自分で○○が相手であると教えます。そして、

相手の大きさ ÷ 自分の大きさ = 倍の数

と倍の数の計算を言葉の式で定式化します。こうして立式と計算を迷わずにできるようにします。こうすることで「□□をもとにする」と○○は何倍ですか」という問題文なら「もとにする」数値がわる数になると判断して解けるようになるでしょう。

さらに、下図のように実寸大のテープを黒板に貼って 0.4 倍を可視化します。



© 1988 Hayao

Miyazaki/Studio

Ghibli



学級担任を離れて 気付いたこと

高橋 桂 吾

【はじめに】

今年度から、主幹教諭になり担任を離れることとなった。私にとっては転職を考える程の大きな変化。自分が担任をしていないことへの違和感。日々、子どもたちと校庭を走り回っていた休み時間や、「ああでもない」「こうでもない」と子どもたちと悩んだ授業は、私から遠く離れた存在になっていくように感じた。しかし、担任という立場を離れたからこそ見えてくる学校の姿がそこにはあった。今回は、今年度担任の立場を離れたからこそ見えてきたものについて書かせていただく。

【はじめての専科の授業】

今年から初めて、6年生の社会科を受け持つことになった。私の専門は国語科なので、どのような学びを子どもたちと行えるのか不安な部分もあった。また、各学級の進度を合わせることに、授業の内容に偏りが出ないように工夫すること、それぞれの学級の子どもたちが出す雰囲気大切にすることなど、多種多様な工夫が必要であった。しかし、その中でも一番大切にすることは子どもと授業を作り上げることであった。

「社会は資料が大切」と先輩や同僚から言われていたが、各学級をもつことでその意味がより深く感じられた。この言葉は、単に社会科は資料選びが重要というだけではなく、選んだ資料と子どもたちをどのように関わらせるかという指導観を、教師がしっかり持ち合わせなければならぬということの意味していると思う。それは、教材として申し分ない資料でも、その資料と子どもを教師が結びつけてあげなければ、資料のもつ力を存分に発揮できないと感じたか

らである。

同じ資料を用いても、学級ごとに子どもたちから出てくる考えが全く違う。このような経験を、授業をする度に味わうこととなった。1組ではスムーズに出た考えも、2組では10分経ってもたどり着かない……。学級担任だった頃に比べ、教材研究はとも時間がかかるようになった。しかし、この教材研究に時間がかかる現状がとても幸せだと感じている。同じ資料で2学級分の授業イメージをもたねばならない、それは、一つの資料の可能性を広げることになる。

ある日の授業、憲法の学習を行ったときである。私の考えていた発問では、「憲法は何のためにあるの？」からスタートする予定であった。でも、前時までの授業で、子どもたちにもっと踏み込んで聞くことが大切だと感じた。それは、「憲法って何条あるのかな?」「たくさんあったら覚える気しない」という子どもたちの会話を聞たからであった。そこで私は「みんなだったら憲法第一条に何を書く?」と問うことにした。一番伝えたいことが第一条に書かれているはず。この第一条を知ることから授業をスタートすることに急遽変更した。すると、日本における天皇の存在の意義、大日本帝国憲法との違い、国民とは何か……など、たった一つの発問から、とても深く考える子どもたちの姿が見られた。子どもの何気ない会話から憲法という資料の価値を再確認できた瞬間であった。

このように、子どもとの何気ない会話から資料の新たな価値を見つかったり、学級の雰囲気に合わせて発問の仕方を変えたり、資料を提示する順番を変更したりと試行錯誤の連続を繰り返している。今の私にとってとてもこの教材研究

の時間が楽しく幸せな時間であることを自覚することができた。専科になったからこそその新たな楽しみとして今後も教材研究に励んでいきたい。

【担任の先生という存在】

主幹教諭になり様々な学級の補欠に入ったり、空き時間に学級を回って子どもの様子を見て回ったりすることで、今まででは考えられないほど多くの子どもに関わるようになった。様々な学級の個性を知ること、その学級でどのような学びが広がっているのかをうかがえるようにもなってきた。

しかし、各学級を回り一番感じたことは、担任の先生方のすばらしさであった。どの学級も子どもたちの姿に合わせ、個性を伸ばす取り組みがなされていた。朝の会パターンも学級によって工夫されており、スピーチがある学級や給食献立を発表する学級、歌を歌う学級と担任の先生方の色が濃く現れていることに気付いた。また、教室掲示も係掲示板や学級目標、気になるニュースなど、様々な取り組みが見られ、子どもたちとどのような学級を築いているのかが伝わってきた。各学級と関わることでできる立場だからこそ感じられる素敵な体験である。

また、学級担任がいかに子どもたちの心のよりどころになっているのかもひしひしと感じることができた。担任が不在になると落ち着かない子、友達や先生に話したいけれど話しかけられない子、いつも以上に頑張って学級のために働く子……。主幹教諭として補欠の授業に入るからこそ気付くことのできた子どもの姿である。そのような子にどうアプローチするのも考えなければならぬ。できるだけ多く、先生方と

関わり子どもの様子をつかんでおくことが主幹教諭にとって大切なことなのだと学ぶことができた。また、主幹教諭として、先生方を支えるために何ができるのか、改めて考え実行しなければならぬと思うようになった。

【個別の対応】

学校は小さな社会であり、その中で過ごす子どもたちは日々、喜びだけではなく悩みや辛さを感じていることが分かった。担任時代は、学級・学年や同じフロアの学年くらいの動きしか分かっていなかったということを痛感した。

学校には、私が思っている以上に困難を感じ悩んでいる子がたくさんいることを主幹になり気付いた。友達と喧嘩したり、家族と意見が合わなかったり、授業が分からなかったり、なんとなく気分が乗らなかったり、学級にいるのが嫌になったり……。様々な子どもの姿があり、一人ひとりに対応する教員が必要であることも分かってきた。同じ時間に複数の子が悩みを抱えて学級に入れないということもしばしばあった。私の子どもの頃にはこのような状況を経験したことはなく、現代は子どもたちがたくさん

の悩みを抱えている時代なのかもしれない。悩みを抱えている子への対応も私の大切な役割。一緒に虫探しをしたり、遅れている授業と一緒に進んだり、悩みを聞いたり……。様々なことを一緒に進んでいる。ちよつとしたエスケープゾーンとしての私の存在。主幹教諭は、このような大切な役割もあることを実感している。

【保護者の大切さ】

主幹教諭の仕事の一つに保護者対応がある。しかし、この保護者対応という言い方が私はな

んとなく苦手である。子どもをしつかり育てたいという思いは、教師も保護者も同じであると私は思う。「対応」という言葉が、問題に直面しているというような意味に感じられることが、私の違和感の根源なのかもしれない。

主幹になり、保護者の方と担任時代とは比べ物にならないくらい話をしている。実際、学校に対する苦言や依頼など、様々な意見が届く。しかし、どの意見にも共通していることは「子どものため」という思いであった。

保護者の方の話に耳を傾けると、難しい要求もあるが、その要求が出る背景を知ることが大切なのだと思いついた。私が今大切にしていることは、できるだけ多く保護者と関わり、意見の背景を最後まで聞くことである。そのためには、その子がどのような子なのかを知っておくことが重要である。やはり、児童一人ひとりを知ることが大切で、そのためには担任の先生と話し児童理解を深めなければならない……。主幹教諭は、学校の情報をできるだけ多く知らなければならぬということも分かってきた。

【おわりに】

主幹教諭という新しい立場から学校を考えるようになり、教材研究の楽しさ、子どもたちを見る目、先生方や保護者の方との関わり方など、様々な面で教師としての変化があった。この、担任ではないからこそ見えてきた世界をもっとしっかりと見詰め、私だからこそできる教育とは何かを今後も考えていきたいと思う。

(富谷・明石台小)



おすすめ映画

阿部菜知子



「宝 島」

大友啓史 監督 2025年

2025年のわたしのベスト映画は間違いなくこれ！
自分の中ではあの「国宝」を超える衝撃となりました。
舞台は1950年代の戦後の沖縄。オープニングは、
なんだか汚い男たちがアメリカ軍に銃撃を受けながら基
地の中を車で逃げ回るシーンから始まります。

予告を見て面白そうと思ったものの、予備知識もなく、
聞きなれない沖縄ことばは字幕もなく、「え？『戦果ア
ギヤ』って言うてる？ 何それ？」「あの時代の沖縄っ
てこんなか……」などと忙しく思っているうちに、物
語は、冒頭から行方不明になる島の英雄オン（瑛太）を
探すミステリーに。どうやらオンがいなくなったのは「予
定の戦果」を見つけたかららしい。それは一体……？

オン、グスク（妻夫木聡）、レイ（窪田正孝）ヤマコ（広
瀬すず）といった当代の実力俳優の演技は圧巻の一言。
ゴザの暴動シーンでのグスクが叫ぶ姿は忘れられません
（ちなみにここだけ字幕ありました）。基地でのレイの叫
びもビシビシ響きました。

この映画は、彼らの青春群像
劇であり、ミステリーでもあり、
そしてなんといっても沖縄問題
が分厚くからみあっています。同
じ日本人でも、震災のように、わ
れわれ東北の人間にしか分から
ない思いがある。沖縄にはやはり、
沖縄の人間にしか分からない思
いがある。でも、本土の人間とし



て、「分からないかもしれないけど、知っておくべきでは
ある。」そんなふうに心を動かされた今年の1本でした。

（仙台・小学校）



読書のすすめ（第22回）

矢部智江子

『サッカーが勝ち取った自由』 アパルトヘイトと戦った刑務所の男たち

チャック・コール マービン・クローズ著
実川元子訳 白水社 2010年



アパルトヘイト時代に、南アフリカの政治囚が数多く収容されたロベン
島刑務所内で、受刑者たちは、サッカー競技に本格的に取り組むためにマ
カナサッカー協会を設立しました。この本は、その驚くべき歴史を記録し、
伝える本です。マカナサッカー協会は、人種差別主義に基づくアパルトヘ
イト政策の象徴と言われた悪名高い刑務所において、サッカーを通じて受
刑者が人としての尊厳を持ち、互いへの敬意を忘れず、そして民主主義の
精神を育むことに大きな役割を果たしました。何千人もの受刑者たちが、
苦しい獄中生活をサッカーによって充実させ、サッカーを通して学び、力を得て、自由の国、南
アフリカ共和国をつくることに役立てたのです。

前半は、アパルトヘイト政策のすさまじさがたくさん描かれています。1950年代に「パス法」
という法律が定められ、黒人や有色人種の人たちは、居住、労働および移動を許可される地区が
厳しく制限されました。

後半は、刑務所内でサッカー協会を設立し、刑務所オリンピックを開催する様子、そして受刑
者たちが島を出てからのことが書かれています。私が特に感動したのは、受刑者は刑務所の中
でかわるがわるサッカーをする許可を要求するのですが、最初は刑務官にせせら笑いをされ、相手
にされませんでした。その後は激怒されました。そして次には、「食糧チケット」を取り上げられ、
週末に食事がいっさいできない罰が与えられました。でも、彼らは諦めませんでした。こうした
粘り強い取り組みで、サッカーをする権利を勝ち取ったのです。

サッカーが好きな人はもちろん、サッカーやスポーツに興味がない方でも、とても読み
応えのあるおもしろい本です。どうぞ読んでみてください。（元小学校教員）

おすすめ
BOOK



心に刺さる詩

みやぎ教育相談センター相談員 内記英明

教職を離れて10年になろうとしています。今は、教育相談という形で教育に関わっています。ここに挙げた竹本源治氏の詩は、教職員組合が戦後一貫して掲げ続けてきたスローガン「教え子を再び戦場に送るな」の象徴となった詩として、私は捉えています。

戦死せる教え児よ

竹本源治

逝^ゆいて還^{かえ}らぬ教え児よ
私の手は血まみれだ！
君^{きみ}を縊^{くび}つたその綱の
端^{はし}を私も持っていた
しかも人の子の師の名において
嗚呼^{ああ}！

「お互いにだまされていた」の言訳が
なんでできよう
慚愧^{ざんき} 悔恨^{かいこん} 懺悔^{ざんげ}を重ねても
それがなんの償いになろう
逝^いつた君はもう還^{かえ}らない
今ぞ私は汚濁の手をすずぎ
涙をはらって君の墓標に誓う
「繰り返さぬぞ絶対に！」

高知県教職員組合の雑誌『るねさんず』

44号 (1952年1月発行)

戦後数年間続いたアメリカによる日本の民主化政策が、朝鮮戦争勃発を契機として大転換され、日本に再

軍備が課され、再び日本が戦争に巻き込まれるのではないかという危惧を抱いた教職員組合が、アメリカと日本政府の政治的圧力の中で(注1)、徹底した機関討議を経て、掲げたスローガンが「教え子を再び戦場に送るな」でした(注2)。

憲法9条に関する研究が進み日本国憲法をアメリカの押しつけ憲法だとする言説はあまり聞こえてこなくなりました。しかし、9条改悪の動きは止まず、それが困難とみてか、国是の「専守防衛」をかなぐり捨て、2015年に「安全保障法制」を制定。さらに2022年「安保3文書」を閣議決定し、他国領域を日本から攻撃できる『敵基地攻撃能力』の保有を可能としました。最近、その具体化が進められ、アメリカの要求に基づいて防衛費増額と攻撃兵器大量購入。そして南西諸島を中心にその配備が進められ、島民の避難計画と訓練、更には、自衛隊員の戦死を前提にした遺体の処理・搬送などについて葬祭業協同組合連合会と陸上自衛隊との協定締結。

この政府・防衛省の動きは、国民の民意ではなく、アメリカ政府の要求とその要求におもねって、権力の座にしがみついて行く偽保守政治家たちのごく一部によって操られているように見えるのです。

このようにじりじりと、しかも確実に戦争・戦争準備を進める日本政府の歩みを観ると、益々この「戦死せる教え児よ」の詩が想起され、私の心に刺さるのかもしれない。この不安と心配が、後から顧みたとき、「杞憂」であつて欲しいと思いつながら日々活動し、過ごしています。

(注1) 1949年9月頃から1950年2月にかけて教職員に対するレットパージが全国で強行されている。さらに並行して労働運動への弾圧も強まり下山・三鷹・松川事件の謀略事件も起こっている。

(注2) スローガン「教え子を再び戦場に送るな」は、1951年5月29日から4日間。兵庫県城崎町で開催された日教組第8回定期大会で掲げられた。その経過については『おおさかの子どもと教育』30号2001年1月発行の元大阪教職員組合中央執行委員長 東谷敏雄氏の特別寄稿を参照されたい。

「みやぎ教育相談センター」

TEL 022-272-4152

土・日曜と祝日をのぞき

10時から17時

ボタンの掛け違い

渡辺 孝之（センター運営委員）

こんなのんびりした言葉がふさわしいか疑問だが、新給特法による教員の処遇改善交渉をしながら、ずっと思っていた。

教員が勤務時間を超えて働いていることを労働基準法に基づく「労働時間」と認めない文科省。それを「自発的労働」と言っておきながら、「時間外在校等時間」という概念を持ち出してきて挙句の果てにそれを30時間にするという法律に書いてしまった。どっちの法律が正しいの？

教職員課長とのやりとり。『人確法』に基づく教員給与の優遇性が確保されなかった。「いやいや、県職員には年間平均58万円の残業手当（月18時間の残業に對して）が出ている。教職調整額が10%になっても追いつかないよ。しかも残業30時間までただ働きでしょ。」

掛け違いはどこまでも続く。全教職員から義務特手当を削って学級担任に加算。しかも特支の担任は含めない。そればかりか通常の学級でも特別支援の子どもが増えて指導するようになったからと特支担任の給料の調整額は下げる。学級担任加算ができたから複式学級手当は無くす！ えつ、大変さはどこかに消えたの？……。

ボタンを掛け違えて外を歩いたら笑われて普通は上から掛け直すのだが、それを笑う人がいないでも思っているようだ。確かに笑う以前に教育という仕事に愛想をつかされはじめているのに。

子どもの風景「作品について」……………佐藤 秀寿（宮城作文の会）

涼さんは、6年生になった4月に転校してきました。始業式ではかなり緊張した様子でしたが、あつという間に学級みんなとうち解け、仲良くなりました。この学校は全校児童が30人ほどの小さな学校ですから、下級生とのかかわりもとても密です。休み時間には学年を問わずに鬼ごっこやサッカー、卓球などをして遊んでいます。ユーモアがあり、みんなにやさしく接することができる涼さんは、縦割り班活動でも活躍するようになり、いつの間にか下級生からも慕われる存在になりました。

この作品は、卒業を間近に控えた2月末に書きました。涼さんは、各学年からの出し物を嬉しそうに見ていました。特に2・3年生の出し物では、数日前にあった昼の放送の「6年生にインタビュー」で、「もう1年この学校にいたいです。」と答えたことをセリフに入れていたことに、「話したことをしっかりと聞いてくれていたんだ」と安心していきます。下級生からたくさんの「ありがとう」を受け取り、「この学校に転校してきてよかった」と改めて感じる事ができた「6年生を送る会」でした。

センターの動き

〈10月〉

10日（金）第11回事務局会議

11日（土）午前・「教育」（10月号）

を読む会 午後・研究部会

18日（土）算数講座

（講師 林和人さん）

20日（月）ゼミナールsirube『人間とその術』9講2「美的世界の創造」

〈11月〉

3日（月）『みやぎ教育のつどい』

講師 渡辺真由子さん

7日（金）こくご学習会（説明文「固有種が教えてくれること」）

8日（土）午前・「教育」（11月号）

を読む会 午後・研究部会

10日（月）『道徳と教育』（中村正直）

14日（金）第12回事務局会議

15日（土）映画『沖縄戦』（宮城子どもを守る会）

17日（月）ゼミナールsirube『人間とその術』日本の美学論について

22日（土）中森孜郎先生『百寿の会』

28日（金）第13回事務局会議

〈12月〉

6日（土）午前・教育のつどい実委

午後・高校生公開授業『平和という贈り物』講師 日本被

団協 田中熙巳さん

13日（土）仙台市民の会講演会『追

いつめられる先生と子どもたち』講師 桜井智恵子さん

20日（土）午前・「教育」（12月号）

を読む会 午後・研究部会

22日（月）ゼミナールsirube『人間とその術』9講3「日本文化と美の心」

26日（金）つうしん121号放送
第14回事務局会議

編集後記

初代研究センター所長の中森孜郎先生が、今年11月20日に満99歳の誕生日を迎えられた。そのことをお祝いしてセンター運営員長の数見隆生先生が中心となって「中森孜郎百寿の会」が22日に開かれ、約60名の関係者が集った。その中で、ほうねん座の佐藤正信さんが、ソーラン節を踊った。すると、中森先生も立ち上がり一緒に踊られて、参加者を驚かせると共に、生きる勇気をいただいた。宮教大で中森先生は佐藤正信さんと共に『日本の芸能』を体験的に講義・実践された。来年11月には満百歳を迎える。

前号120号で、広木克行さんから、不登校の見方と見守り方のお話を伺った。それを受けて、「今子どもが笑顔で通いたくなる学校づくり」に学校現場でどう取り組んでいるかの報告を4名の教員から頂いた。報告を読んで、子どもと学校を取り巻く状況の困難さに報告者の「怒り」を感じた。小野寺さんが書いているように、この研究センターも中森先生の仕事を受け継ぎながら、ささやかな「バタフライエフェクト」になることを願っている。2026年も地道に問題を提起していきたい。

（達）

